

きです。

ちなみにちょっと辞引きをひいてみました。『二種類の火』という項にひきつけられました。引用しますと、

アフリカの“カンパ族”では、家の外の火は男が焼く料理に使い、家の中の火は女が煮る料理に使う。同じアフリカの“イテソ族”では、“男の

## 中世のあかり

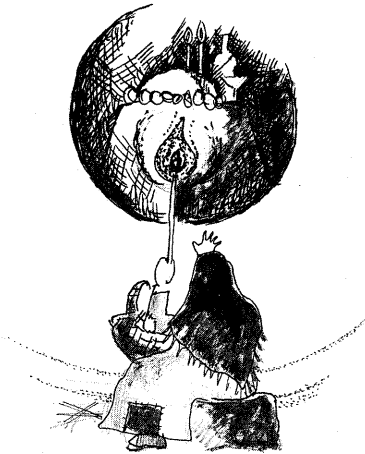
伊藤 里麻子

ここに挙げた絵は、十七世紀の北フランスの画家、ジョルジュ・ド・ラ・トゥールの描いた「大工

火”は地面の上でそのまま燃やす裸の火で、“女の火”は四つの石で作られる炉で焚かれる火……と。だとすると、私の好みは戸外での勢いのある直火なら……。

私は“女”じゃないのかな？……と苦笑してしまったのです。

(料理研究家)



の聖ヨセフ」(パリ、ルーブル美術館)である(図1)。幼いイエスが父ヨセフの仕事場にいる。イエ



は、労働にいそしみつましく生きる人々の、日々の暮らしの尊さを思わせるものがある。この絵のなかで光はじつに雄弁なのである。

十七世紀初頭のイタリアの画家カラヴァッジオ作の「聖マタイのお召し」（ローマ、サン・ルイージ・ディ・フランチェージ聖堂）（図2）も光が印象的な絵である。一見したところ、ここに描かれているのは、当時のありふれた光景である。暗い室内でテーブルを囲む人々。一条の陽光が差し込み、一番奥で金を勘定する若者に注いでいる。この若者こそマタイである。マタイは取税人だったが、キリストに選ばれ弟子となった人物である。この絵はマタイがキリストの召命を受けた瞬間を表す場面なのであり、一条の光は彼を召命する神の意志である。光は世俗の世界から神の世界に選ばれて入る、マタイの運命の変化を劇的に示している。

神は光である。

これは、この二枚の絵の描かれるより前の中世に



◀ 図2 「聖マタイのお召し」（一六〇〇年頃）





▶ 図4・A グリザーユ窓

オーストリア、ハイリゲンクロイツ修道院

に用いられることもあった。しかし、無色の（と  
いっても、後述するが、今日のように全くの透明で  
はないが）ガラス窓を持つ教会も建てられたのであ  
る。シトー会という修道会に属する教会である。



▶ 図4・B グリザーユ窓

図例（図4）にみられるように、シトー会の教会  
の窓には、色のないガラスが用いられ、窓一面に文  
様が描き出される。この図では植物の文様である  
が、組紐文など抽象的な形の文様の例もあるし、両  
者が組み合わせられているものもある。このような窓  
を、ステンドグラスに対し、グリザーユ窓という。  
シトー派の建築にもステンドグラスが用いられな



の、十三世紀の記録をみると、ステンドグラスは取り除くべし、と述べられている。

シトー派の教会の、こぢんまりとした建築の、粗い石の壁には飾りが無い。そのグリザーユ窓からは透明な光が溢れる。清らかな神の光である。

透明とはいっても、当時の技術では、ガラスは完全な無色透明というわけにはいかない。濁りがあり、わずかながら灰色や緑色が入っていたり、黄色がかっていたりする。そのことがかえって、窓を通る光を柔らかいものにする。色のない窓は、外の風景の色も映し出す。窓は自然の色を堂内に導き入れ、神の世界と外の自然を重ね合わせる。

ゴシックに先行するロマネスクの教会建築は、重みを壁で支える構造のため、窓はあまり大きく開けることができなかった。そのため、教会のなかはかなり暗い。

これに対し、ステンドグラスの窓をもつゴシック

様式の教会堂は、ほとんど壁全体が窓といってもよいような構造である。ところが、教会のなかには、ロマネスク教会ほど暗くはないが、やはり決して明るくない。ステンドグラスが原因である。ステンドグラスを通る光は、ガラスの色に遮られて、外光よりもかなり暗いものになっている。中世の教会のなかには、決して明るいものではなかった。

暗い堂内に差し込む小さな光。光の届かないところはなお暗い。暗闇には、わずかな光も貴重である。人々はその微光に神の姿を見もし、暗闇から照らされることの喜びも感じた。

わずかな光といえば、最初の絵(図1)の蠟燭の灯も暗い光である。蠟燭の灯は、あかりの周囲の限られた範囲を照らし、見る必要のあるものだけを浮かびあがらせる。蛍光灯のように、不遠慮に、灯下の物をすべて照らしてしまうことはない。

図2のような、窓からの光もまた、今日の、マンションのベランダやビルの窓から、元気よく室内に

